

「前例を超える・前例を創ること」の峻厳さ

松田清人（大学院生、製薬企業勤務）

矢島先生、ありがとうございました。

最後のスライドにある、「思考することなく考えることなくそのまま受け入れること。思考しても考えただけで無責任にそのまま受け入れること。自分に出来ることは何だったのか、もっと出来ることがあったのではないか。今出来ることは何か。」は、単に行政の罪だけでなく、私たち国民にも言えることだと思えます。

日本が成熟した社会へなることに少しでも貢献するため、私自身も肝に銘じたいと思います。

「副作用は薬が起こす・薬害は人が起こす」

まさに、今回のHPVワクチン積極的勧奨再開は、この言葉が当てはまるのではないかと危惧と、そうならなければ良いがとの願いを持ちました。

一番に考えなければならないことは「自分で選択できずに子宮頸がんワクチンを打たれた健康な少女たち」です。製薬企業に勤務する一員として忸怩たる思いを持つと同時に、組織に属する人として「自らの思いや考え」を貫き通すことができないどうしようもなさを感じました。

「前例を超える・前例を創る～医療・福祉の受け手の身になって」の峻厳さを改めて感じるところです。

社会の中には、薬害リスクを阻むことのできない「仕組み」が存在していると思わざるを得ません。ゆき先生の言われた「薬害を引き起こす四位一体：製薬会社・専門医・政治家・行政」です。

厄介なのは、各組織に属している人は、それぞれの立場で「これが良い」と信じているからこそ強い行動に出れるのだと思います。人が不幸になっても良いと考える人間は、「いない(?)」ものだと思いたいです。しかし、結果として間違った決断・行動をするのも人間だと充分認識しています。

自分事として「その立場になったらどのように決断・行動するだろうか？」を考えると、矢島先生の当時の決断は、「政治や組織環境が許した」とご謙遜されましたが、すごい決断・行動だと思いました。

かたや、現健康局長（佐原さんとはある官民団体で一緒に勉強したことがあります）の気持ちは「悔しかったらう」と拝察いたします。

日本のケルシー博士といわれる隈本邦彦さんの熱いお話の裏にある「怒り」、聴講生の中の朝日新聞記者、高波さんの組織に対する「残念さ」、そしてゆき先生の「信じられないという感情と一人でも多くの人に知ってもらおうとする熱意」。これらの感情が交じり合う時間でした。

気になった点として、

①2013年6月14日の健康局長「勧告」には「副反応の発生頻度が明らかになり、国民への適切な情報提供ができるまでの間、積極的勧奨をすべきではない」とあるのに、今回は唐突に再開が決まったように感じたこと。「副反応はおおむね横ばいであった」の意味を含め、ひろく一般の人に情報公開する方法はなかったのだろうか？

②矢島先生以外の方の発言にあった「選挙がらみで政治も深く考えずに再開になった」「製薬企業のロビー活動が効いた」「ひょっとしたら経済的動機につながる不透明さがあったのかもしれない」などは、真に悪意から出たものであれば必ず世に出てくるものだと思いたい。「天網恢恢、疎にしてみらず」です。

③隈本邦彦さんのお話にあった「リスクを冒しての接種より、20歳以降に検診（受診しにくいというハードルはある）を受けることで充分予防できること」「デンマークで20歳以上の人に打った場合のデータで、ガンの予防効果は有意差なしであった」「子宮頸がんによる死亡率・罹患率のエビデンスはないこと」等は、もっと喧伝すべきではと感じました。

~~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

矢島先生から：

早速、レポートありがとうございます。

本当に大事なご指摘が述べられていると思います。

厚生労働省の審議会は公開されていて、資料も見ることができ、議事録も公開されます。

ただ、公開されていても、それをうまく国民に届ける仕組みが十分に機能していないのかもしれない。情報に簡単にアクセスできることがかえって情報の過多を生み、情報を操作する人が出てきたりしています。情報を自ら判断でき、選択できることが大事だと思います。行政は、その判断基準となる情報を正確

に提供することが役割だと考えています。

最終的に決めることができるのはご本人（とその家族、仲間・支援者）になります。自ら判断し選択できるよう、正確な情報を提供していくことが大事だと考えています。

接種による被害者をこれ以上増やさないためにできることは何かを皆で考えていくことが大事だと思います。

選挙は民主主義を守っていくための大事な手段です。政治家の活動を評価する機会でもあります。利害が交錯するなかで、国民の選択が良い方向に向かうことを信じています。子宮頸がんワクチンの積極的勧奨再開を活動の成果とする政治家が、国民の審判をうけ、国民がどのように判断したかが重要になります。

良かれと信じて行ったことが、結果的に人の不幸を招いたしまったことを、行政は繰り返し経験してきました。

この教訓を後世に伝えながら、後輩が（ひょっとしたら全ての成人国民なのかもしれませんが）同じ過ちを犯さないようにしていく努力を続けることが大事なのではないでしょうか。

たいへん貴重なご意見、ありがとうございました。
とても勉強になります。

矢島鉄也